

滑稽と軽み

「八木健会長の滑稽と芭蕉翁の軽み1」

2009.01.25 (聞き手 高橋素子)

高橋 八木健会長が目指され現に実行されていらっ
しゃる「滑稽」は、芭蕉翁が円熟期に積極的に
唱え、今日でも俳文芸にとって、一つの理想と
されている「軽み」と同義語と考えていいので
しょうか？
それともいろいろな相違点が・・・？

本日はその疑問点を中心に、会長の俳句と芭蕉
翁の句を滑稽句の作り方のからの上から比較検
討させて戴きたいと思います。「滑稽」につい
てより考察を深めてゆく上からも御協力下さい
ね。

会長 お手やわらかに お願いしますよ。(笑い)

高橋 では、「軽み」ってなあに？という出発点か
ら・・・。

広辞苑によれば、「軽み」とは、蕉風俳諧で重
んじた作風の一つ。対象に素直に接することか
ら生まれる平明さや印象の明瞭さ、理屈を離れ
た無作為な詠みぶり、あるいは、そうした句を
生み出す作者の心理状態を指す場合もあ
る・・・等と書かれています。

でもこんな理論を述べるよりも、実際に会長の
句を取り上げさせて戴いて、芭蕉翁の句と比
較、分かり易くご説明戴く方が、私達には簡単
で分かり易いと思われますのでよろしく願い
致します。(笑い)

会長 「軽み」は「重くれ」に対する呼び方です。芭蕉翁は長いこと「重くれ」の句を作ってきて晩年になって「軽み」に到達したわけですが、おっしゃるように、「軽み」は「句風」のことですね。句風は表現の仕方ですが、軽みの句は、内容的に滑稽と不可分なのです。

高橋 成程。だんだん私にも分かって来るような気がして来ました。（笑い）では、今日の本題を始めさせて戴いて良いですか。どの句からが良いでしょうね？ インパクトが強いこの句から始めさせて戴きますね？

★ 炎天の化石のさかな口ひらく

物凄い暑さに人間のみならず、化石の魚までもが口をひらく・・・想像するだけでも、面白い句ですね。非科学的で良いはずの俳句ですが、この句はカルシウムと土の膨張係数の若干の違いから科学的にも証明出来ると言われるのですから、インパクトが強いだけでなく正に感動です。うーん！インパクトと感動の点から、芭蕉翁の句を挙げるとすれば、

☆ 吹き飛ばす石は浅間の野分かな

でしょうか？ ご説明戴けますか？

会長 更科紀行に出てくる句ですが、別の書物でこの句の推敲課程が明らかになっています。

★ 秋風や石吹き風す浅間山

⇒ ★ 吹き風す浅間は石の野分かな

⇒ ★吹き落す浅間は石の野分かな

⇒ ★吹き落す石は浅間の野分かな

⇒ ★吹き飛ばす石は浅間の野分かな

となったわけです。

「吹き飛ばす」には、「勢い」があります。インパクトを、素直に表現できるかたちに落ち着いたのです。

私の「炎天の化石」の句は「炎天」のインパクトを化石のさかかに口を開かせるという誇張で表現したものです。

高橋 流石！分かり易くて良いですね。助かります
(笑)
では次に参ります。

★ 一期一会よ肩に來し初蝶も

春になって、初めて出会った蝶が肩に止まった。この蝶はもしかして亡き母の化身かも・・・なんて思うとたまらなく蝶が愛しくて・・・

でもこの蝶にまみえるのも一期一会などと考えると益々哀しくなってしまうですね。「俳句は思いを書く」とは会長のお言葉ですが、詠み手のみならず、読み手の思いも引き出してくれる良い句ですね。

・・・ 芭蕉翁の句を挙げるとすれば・・・ああ！絶対にこの句ですよ。

☆ おもしろうてやがてかなしき鶺舟かな

会長 季語は「鶉舟」ですが、内容的には「思い」を前面に出していて鶉飼見物に興ずる作者の心理の経過を「やがて」という接続詞で繋いでいます。

「おもしろう」と「かなしき」と相反する表現でドラマが生まれます。私の句は「初蝶」という命の輝きとの出会いを「一期一会」で裏切っています。つまり・・・俳句は哀しみを描くものなのですね。

高橋 よく分かります。この調子でご教授下さいね。では次の句は・・・これにします。

★ 下半身曝し二股大根よ

現実には、大根がふたまたに分かれているだけですが、確かに擬人化すれば随分艶っぽい大根がという事に・・・。（笑い）「エロチシズムも俗語を用いることも滑稽句の一手法である」とは会長のお言葉ですね。

ここでこの句を取り上げさせて戴いたのは、芭蕉翁の所謂「高悟帰俗」という言葉の意味を分かり易くご説明いただければと・・・。

芭蕉翁の句を挙げるとすれば

☆ 鶯や餅に糞する縁の先

と、いう事になるのでしょうか？

会長 「高悟帰俗」は「俳諧における真心を高く持った上で俗世間に題材を求めなさい」という芭蕉の教えです。

「鶯や餅に糞する縁の先」は「糞」という俗な

題材を使ったということですね。
この句の価値は「鶯の声」を愛でる季語の本意を裏切ったことにあります。

私の「下半身曝し」は、誰が見ても下着をつけない状態の大根ですが大根そのものに「俗」があるのではなく「見る人の心」に俗を見つけたのです。この場合は私の俗な心を「二股大根に同情するかに」描いたわけです。

高橋 成程、そう言うことなのですか？勉強になります。では、次の句にあって良いですか？

★ 兼題の栗に苦吟のイガ痛む

うーん！正に私の為に詠んで戴いた句の様ですが、「栗の毬」と「胃が」を掛詞にした「言葉遊戯」の句ですね。

芭蕉翁のこれに当てはまる様な句と言え
ば・・・あっ！これが良いですね。芭蕉翁が
「二見」に行くとき蛤の「蓋と身」に掛けてお別れに詠まれた句ですから、正に言葉遊戯ですよ。

☆ 蛤のふたみに別れゆく秋ぞ

会長 二見をめざして別れ行く思いを行く秋の寂しさとして描いています
蓋と身を二見にかけて「掛け詞」として使っています。

たしかに言葉の洒落の可笑しさがあります。しかし、この句で注目すべきは「へ」でなく「に」であるということです。
つまり、芭蕉は自身を蛤になぞらえて「辛い」ということを言ったわけです。「へ」ですと目的地を言っただけということですから

高橋 「に」と「へ」のひらかな一つで内容はそれ程違って来ると言うことですね。
十七文字で表現する俳句には一文字、一文字に細かい配慮が必要なわけがよく分かりました。
それでは次の句に参ります。

★ 押しあひへしあひわさび田のわさびたち

これは、対象と一体化した後に、客観写生することで説得力が生まれると、「秘伝の技」を教えて戴いた「擬人化」の句ですね。

かつて会長も「鳥を詠う時は鳥になれ、雲を詠う時は雲になれ」と教わったとか、ご著書「八木健の皆さん、俳句ですよ」で拝見しましたが、・・・確かに、わさび田のわさびたちは密植されて溪谷で自由気ままに生育しているわさびが羨ましいでしょうね。

芭蕉翁の句で言えば

☆ 松のことは松に習へ
竹のことは竹に習へ

ということになりますよね。

会長 「松のことは松に習へ、竹のことは竹に習へ」は、その続きの部分が大切なんです。
「三冊子」には「習へと言ふは、物に入りてその微の顕て情感ずるや、句となる所也」とあります。

- ① 対象に没入
- ② 対象の命が見えてくる
- ③ 作者にある感情が湧いてくる・・・

という作句の手順を言っているのです。

高橋

★ ガラス窓磨いて秋の空嵌める

「俳句は非科学的で良い」は会長のおことばですが、実際には、どこまでも青々とした秋の空が窓枠にすっぽり嵌るはずもありませんが・・・少し離れて見て見ると、秋の空が窓枠を額縁として一枚の絵の様に見えるから不思議ですね。窓ガラスをみがくと更に美しく・・・

芭蕉翁の非科学的句と言えば、
ああ、有名なこの句ですね。

☆ 閑さや岩にしみ入る蟬の声

会長 奥の細道の旅、山形県の立石寺で詠んだ句ですね。
古池や・の句と並んで芭蕉の代表句中の代表句です。

この句ははじめ「山寺や石にしみつく蟬の声」からはじまってさまざまに推敲されたのです。

「さびしさの岩にしみ込む蟬の声」
「さびしさや岩にしみ込む蟬の声」そして
「閑かさや岩にしみ込む蟬の声」

そして最終的に

「閑かさや岩にしみ入る蟬の声」
となったのです。

岩山に蟬の声が吸い込まれてゆく静けさは「しみつく」でも「しみ込む」でもない「しみ入る」がいいですね。非科学的・・・と言えばその通りです。非科学的であればあるほど詩的になるような気がします。科学的だと単なる解説になりますからね。

高橋 「非科学的である程より詩的な句になる」のですか？またひとつ 「秘伝の技」教えて戴きましたね。有難うございます。（笑い）それにしても、名句はこのように推敲を重ねて出来るものなのですね。では次の句について教えて下さいネ。

★ 音たてる海に入水の夜這星

夜這星とは流れ星のことですね。面白い表現ですね。ざぶん・ざぶんと、打ち返す波音をたてる海に流れ星が吸い込まれてゆく「瞬間」をお読みになった壮大な句ですね。素敵です。

瞬間を詠んだ芭蕉翁の句と言えば・・・ああ！有りました。

☆ 暑き日を海にいれたり最上川

勿論星の出ている夜と太陽が西の海に沈んでゆく夕方と言う時間的なずれはありますが、よく似た情景の壮大な瞬間の句ですね。両者の同義点と相違点を「滑稽」と「軽み」という視点からのご説明お願いして良いですか？

会長 「暑き日」に二説あります。「太陽」と「暑い一日」です。この句は最上川の河口に開けた海に沈む太陽のことだと思えますね。一日だと観念になりますが、太陽ですと視覚的、絵画的です。大きく開けた最上川河口のステージ奥に海原がある。その海原に暑い太陽が沈む・・・ダイナミックな感じですね。

作者は最上川の真ん中に陣取った船上の観客です。熱々の太陽は海に沈めたぜ。と言ってるわけですね。「軽み」か「滑稽」か・・・その詠みっぷりが軽みですね。

私の句は夜這星が入水する時に大袈裟にも音を

たてるというのですから芝居じみしています。滑稽でしょうか。

高橋 成程、「軽み」と「滑稽」の違い分かって来た様な気がします。では、最後はこの句で・・・

★ 孤独死を予感している芒原

哀しい句ですね。確かに芒原や枯野には、人は孤独とか死とか亡き人とかに思いを馳せてしまいますね。それも他人ごとでなく、身近な自分の事として・・・芭蕉翁も旅の途中で自らは、「病中吟」と前置きして詠んだ枯野の句が、実際には、「辞世の句」になってしまった様ですね。

・・・享年50歳。芭蕉翁の希望通り、大津市膳所の義仲寺の木曾義仲の墓の隣に葬られています。

☆ 旅に病んで夢は枯野をかけ廻る

会長 死に臨んでなお詩を求めて夢の中で枯野を駆けめぐっているというのは、軽みをめざした芭蕉らしくないとする見方もありますが、考えてみれば「夢から覚めて詠んだ句」なのです。ということはかなり冷静に自身を見つめている。客観視しているのです。生死の境をさまよっている自身を客観視していればこそ滑稽なのです。子規も絶筆となった「へちま三句」は自身を客観視しているから滑稽なのです。

私の芒原で孤独死を予感しているという句は・・・そういう恐怖に襲われたという程度のもので。そういう感覚が口ついて出るのが「軽み」なのでしたが

高橋 今日、様々な素晴らしいご教授本当に有難うございました。とても良い勉強になりました。会長と芭蕉翁の句をそれぞれに解説して戴きながらの「滑稽と軽み」とてもよく理解出来ました。一日で少し賢くなった様な得意な気持ちも致します。（笑い）

今日教えて戴いたことは、これからの「滑稽句」の実作にぜひ生かして行きたいと思いますが・・・

最後になりましたが、会長の目指されている「滑稽」と芭蕉翁の「軽み」についてのまとめを今一度よろしくお願い致します。

会長 私が目指している滑稽は、日常的に軽快な句作、つまり芭蕉翁のいう「軽み」の中から生れてくるということです。

(2009年 2月号)